

第56回神奈川建築コンクール 一般建築物部門 最優秀作品選評「桐蔭横浜大学 大学中央棟」

審査委員 福井 通

この建築は、大学の新学部創設に伴う新たなキャンパス・プランのシンボリック中央棟として設計されている。開かれた大学キャンパス全体の将来計画を構想し、まさにキャンパスの要の位置に、既存施設との関係性、内外部の連続性、及び構造・環境設備を含む高度な技術により魅力ある空間を構築している。

その総合デザイン力が高く評価され最優秀賞に選定された。

新施設の骨格は明確である。既存図書館と食堂棟を結ぶ南北軸、東側の緑豊かな鎮守の森と西側の将来スペースを結ぶ東西軸の二軸を設定し、この直行する二軸の要の位置に、教育・研究機能と学際・交流機能等を立体的・機能的に構築している。特に学生のアクティビティが最も活発な一階のエントランス空間には、学内外の交流、地域解放を意識した講演・スポーツ・実験等、様々な活動が可能な多目的利用の「クリエイティブスタジオ」が設けられている。この空間は開口部の工夫によりキャンパスのメインアプローチ空間である緑のオープンスペースへと連続的・解放的にランドスケープを意識しデザインされ、この施設のシンボリック空間としての機能を果たしている。

二階以上の空間も二軸に沿って田の字型に大小の諸室が機能的・立体的に配され、スケルトンとしての構造計画も明確である。大空間で構成された建築計画を生かすため、各空間の外周を取り囲む鳥籠型の構造架構が採用され、必要に応じプレストレストコンクリートの格子梁やハイブリッド梁架構とする等、独自の技術的工夫が見られる。

メインアプローチから見たガラスのファサード・外観は解放的で、下部のピロティと上部の深い庇がシンプルな構成に陰影を与え、開かれた大学の新しいキャンパスの顔としてのシンボリック性を表徴している。このファサードの構成には、スケルトンから切り放された環境皮膜としてのインフィルの考え方が取り入れられている。すなはち、内部空間である学生交流ラウンジ周りにはダブルスキンを応用した「縁側回廊」が空間的・環境的配慮のもとにデザインされている。また、自然と眺望に恵まれた気分の良いオープンゼミ室のある屋上庭園、通路空間における人間の身体感覚や知覚に配慮した細やかなデザイン等、全体と部分の総合デザイン力が高く評価された。